



後
後





たつらり

昔の事



一伊集院伊集丹前子たつらりてこのはくをいふも
伊集院 阿るるれいふやうはをいふも
といふ伊集丹

阿るるれいふやうはをいふも

又人白王十代景行天皇四十年東夷征伐時日本武尊甲斐玉酒
折宮子 珥比磨お免玖波瑪須擬度異玖用加祢免流
と折宮子お免玖波瑪須擬度異玖用加祢免流
用比珥波免瑪伊瑪と折宮子お免玖波瑪須擬度異玖用加祢免流

切字のり

一切の字諸セシケルに及切にほ切といふことあるの類目なりて
一白の魂をわ明は字はせしむる語の又わいしむる事なると
ゆめ何事も切字十八字に父母と云ふ神代の子田切の字
十八字女神の系十八字佛道はせし言宗は悉シツシ是の十八字
は数多の又字を極くさまを法極として十八字を切字の父母
とせしむるも十八字の切字はその後ある切字もあつた
あらは古切のなるる自然と語の又字はこれにほれとあ
まといふと後人の切字のなる切字の集りなりと云ふ事

切字十八字のり

う。ね。も。い。れ。既。生。の。し。本。来。の。し。を。字。り。り。
よ。う。つ。せ。あ。れ。早。ぬ。へ。け。り。に。や。
右十八字法抄は後多しと云ふ事にして是を切字なる
事なりと云ふ

和歌十神のり

治定が
此の十神のりは和歌のり字を極りふれ
事なむといふ事

今半の押りけりる切字

肝心のり
此の肝心のりは和歌のり字を極りふれ
事なむといふ事

野のり
此の野のりは和歌のり字を極りふれ
事なむといふ事

褒美のり
此の褒美のりは和歌のり字を極りふれ
事なむといふ事

とくもなほさういふやうな心持のしる

嘆息のみぢ 言らうとせむと云ふ思ひをうらみし
人の命の押くもなほこゝろ

なほこの事押さへむを極つる

願ふのみぢ あつたらんけ世の外の押あつても今と
ひあつてもいふ

そと業をうら業を外の名にあらぬ

当意のみぢ 夫の押さへておのれをうらむらうり
とよ業と云ふいふ

梅ももふのつと目ももる山路のみ

時節のみ 風をうらむと云ふは
おとせむと云ふ

まづいらてはいたるは押さへん

吹流のみ あつたらんけと云ふは
おとせむと云ふ

杜ももつと云ふも 猿の心も

返り あつたらんけと云ふは
おとせむと云ふ

蓮の根のわら水をさす女の戸を

てふのみ 蓮の根のわら水の
おとせむと云ふ

木ももつと云ふも 竹ももつと云ふも

一葉引 鶯ももつと云ふも 花ももつと云ふも

一すつ あつたらんけと云ふは
おとせむと云ふ

はるやノと後

負外のみ

夕のるや 暮るるをこの心

けりこは新のこり(Shinji no Kori) 新のこり

千鳥

同ころが

神のこり(Shinji no Kori) 神のこり 宗祇

山田のこり(Shinji no Kori) 山田のこり 其角

百座記(Shinji no Kori) 百座記 其角

其角通(Shinji no Kori)

あきみ(Shinji no Kori) あきみ 其角

其北(Shinji no Kori) 其北 其角

けり信(Shinji no Kori) けり信 其角

やち(Shinji no Kori)

岩(Shinji no Kori)

信(Shinji no Kori)

岩(Shinji no Kori) 岩 其角

右(Shinji no Kori) 右 其角

と(Shinji no Kori)

早(Shinji no Kori) 早 其角

付(Shinji no Kori)

か(Shinji no Kori)

い(Shinji no Kori) い 其角

とや ぶらやたら

まや

うや 一甲まこる花ものの子孫や

けやまや

よや ともよま智恵の傍を研や

そや 幸木の女門を豊原のがしを智

やふ 其やよひまこるやしらくら

けや 稲妻あまらうらぬ神子の目まはる

やと けや けやまよまらうらぬ

やと 高野の月まらぬさるぬと 晴る

三世のうら

えー けー ぶら

白ー ちー 限五

えらー けー 未本

右限を未本うきの通ふらぬとぶらぬ

ぶら 大日おやら引けー 一うら

限五 けー 一うら 未本

未本 笑お報載くもらぬらぬ

溜いし ともをちやうせし 山丸

言おし 父母の七代うらぬ

けふのうらぐらぐらと同一事

まぬーの字 瑞籟のうらぐらぐら、おのろ

いなす ぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶく

もぬー ぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶく

積りもて廿廿中を回して解する 山丸

但ふむのむぬー如此一もふふふ又中とのむぬーを返さく
せぬ心さう

うー 暑くふくふくふくふくふくふくふく

けふのうらぐらぐらと同一事 ぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶく

ぬのうらぐらぐら

ぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶく

けふのうらぐらぐらと同一事 ぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶく

切水ぬこ エケヒテるへし 此致不ぬふさし句をふ心身し

きこえぬ けぬ うせぬ んそぬ 存ぬ 経ぬ とぬぬ

とぬぬ けぬ ぬぬ 干ぬ 似ぬ

けふのうらぐらぐらと同一事 ぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶく

古き代も 四半のうらぐらぐらと同一事 山丸

らちのうらぐらぐらと同一事 山丸

まじのうらぐらぐらと同一事 山丸

しほのうらぐらぐら

西の神もあつて花の色

さきの木を染つてさきの解 花の色

おけりお通ふらさしきささぬありとえとえんけさぬ

何れも何れし又らのさきさきもあつても何れかして

さきし

二つさきさき

あつてさきさきさきさきさき 宗紙

月神 桂やさきさきさきさき 事柄

二つさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

三つさきさき

福の人もさきさきさきさきさき 宗紙

名もさきさきさきさきさきさき 宗紙

此のさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

とつてさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

やさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

のさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

さきさき

さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさき

らん なまゆかりと想ふらん更衣 来也

けん 後宮にて詞を由らむなり

けん まつと後宮にて詞を由らむなり

けん 起よく友友とせんぬる夜時

けん せんを友とせしとよむ

やら ほろきに結やら信のふ事

やら けふの田舎

あら 不もまきす花の心をらむやう

なつみの田舎

疑のう かのまのゆるし 長清の梅も遠るう花さき

後宮のう 義仲の梅さきのしり月世し

目もあやう

さうむら 木々のさう花のありき 山花

うハ 花のさふ入りの江の月

さうめを梅のさうと詞を由らむなり

うし 栄ゆて花のさうと詞を由らむなり

ういかるをさうと詞を由らむなり

うまね ちのさうと詞を由らむなり

うせう

首のさうと詞を由らむなり

たふぬきの吐キツとほりせらあり月 ねむき

ほのたりのつるう ほの福徳のへ又ふらふらふら
ふらの言根のまをふらうて

せむきのま

きつし水のまをあらせ初難 中夜

不知の初はれ

是れのみしせ

はれ

ず 終て死ぬるまをすす極のま

へ 兼修のまを極まを極く終るま 出るま

け 似るまを極まを極く終るま 合

き せむきられまするのま見せま

見たる

はれ 十の初のつるまを極まを極く終るま

はれ 筆修のつるまを極まを極く終るま

はれ いくつあるまを極まを極く終るま

はれ

はれ 片まを極まを極く終るま

はれ いくつあるまを極まを極く終るま

はれ 活外のつるまを極まを極く終るま

はれ いくつあるまを極まを極く終るま せむき

此のなほ字をさしはくはく

や、 夫とや、にきと、のふりしと梅

海のやこそ海とていふこと

梅とて、 夫とてや、のやしのふりしと

少々のやのふりしと、夫とて、

夫とて、 夫とて、のふりしと、

夫とて、 夫とて、のふりしと、

夫とて、 夫とて、のふりしと、

夫とて、 夫とて、のふりしと、

こそ

こそとて、のふりしと、のふりしと、
えけさせぬ入ぬるのや、のふりしと、

一くぬく、のふりしと、

二文字、 秋、 夫とて、

三文字、 子、 夫とて、

三文字、 目、 夫とて、

眼耳に句、 夫とて、

梅、 夫とて、

梅、 夫とて、

梅、 夫とて、

梅、 夫とて、

梅、 夫とて、

月花もあつて酒の心むらさき
影よきとて浮きうらむを伴こころ
舟形をうら杖実返とるる氣
後ら少ぬ湯殿めを社うら
ほ白粧を何とも一物の上とて以て月花の如きも白き
よより新なる時よ

陸路記 電の年者うらむを伴いむるせ
祝儀らまつうら希一積の底
嬉しきしうらむ信世のうらむが

後甲を茶室に積の底をうらむのうらむに積とてあやむら

くまの底あつてこころは雪の積の底一題にけお新
あつては深き時よ

十八の巻

眉掃を伴ふらむを新の底
ほ白伴うてやうらむ心のやまを伴うらむはと十八
よ世の切とよ

十九の巻

花をうらむを伴ふらむを伴うらむはと十八
ほ白こけうらむらむと二雪句伴うらむを伴うらむはと十八
よ十九の切とよ

以字

切字ありき
あり

三葉集も花名のなまは七ま集
是をくとはうの花はうしは山
猫の意やむき聞のおるる日
相の亦不熟信する 蝶の中
四方より花吹以水て 蝶は海
古物に 昔梅白く 田力とも

けり徳律ありて終て流絶の亦重きは終て終て終て

は 授

辛峰のおき花もくおるあまて
外をきとを江の人のおしるる
口
つとてせハ花とを重きもくうりう
忘れをきうちちけうをクムうめく

芭蕉翁切字カズ

嵐重間

翁著

切ハ盡也

野波間

口

口 節也

支考間

口

口 一句成就也

去来間

口

口 寄也

惟然間

口

四十八字各切字

切字ハ端と言へる間著といふし切字皆間著の
ころらし一句も間著也

寄の引費

あつたといひせの山の申み著るより川のトや世の年

以決ふをう水をはるあつてその中田舎にいもせ山を二りの山
の名こそ申さる地川の流るるとさるすに空りふら必ふる切
こそ性か理に交り別あつて夫婦の別備あるは理こそ
地も合して天もさる地もさる日月もあふ又かつめをさし
天も流るるとさる地も流るるとさる人もさるはいいんそ
け理をさるるとさる人毎ゆ字もあふは理をさるると秘こ

十七句法 一字廢取

古也やかえんをほはれさる

^音音の字を以て言外の言味をほは廢取はさる

一句二隔

初くく水情も小笠をさるける

人言の異もいも親子の情をさるける一七の字を二句に
隔り

一聯二句

親たるのいさるえやうつ花をさる
花女を種はよせりはさる

句のう(はさる)あり

換骨脱胎

花をさるるーまらえ一は花をさる

人づらに政かひのそさるあもはさるはさるは打ぬさるはさるはさる

雙葉

かゝらり角ふりしけしはたの石

けるをひこくばく原氏はたの石をけり

斐前生後

夕のほや秋のいろくの雲のうね

秋の白こぼれ去の花をひらき出一面みまうりるもとをりそ
生に^本遊やかの清又白

曇り異曲

葉まわしてをると雑作の音

葉まわしてをると雑作の音月夜もわらうるをり

句

卯花もやまきし柳のたもとに

夏柳のつぎを云述ぐ柳のたもとに
句に柳暗花明とつる碧岩殿の清くま

風

垣翹の歯手もまじし葉のた

市中の葉もまじりて葉のたもまじりて葉のた

夜

もたつてを言言し秋の丸

人の^短影をいふのたもまじりて葉のた

教戒の一句は寂を破しきり

境

けあつて目もつるゆゑのい皆深し

ち又字余りて境もさう句章好妙と言へ

草

多量も花々のをよハ七三佳

さきよりしてそゝるの象句も言もともなそ

行

忍びの木様もさふく水り

人の産後るとよせせらるる子も ^か 産 難産牛乳の

片鄙ふ生る人と重障も音つ人号さ生誰は夫
と感も是知行たり

生ら

多量作や雨は西施も今秋の花

多量作、数の多西施も三子神一の多人も是を以て是
は第一、神女の少なるや形をちと回心人をせさの体と
は、金指作、神真毛、つらき

無心所着

似て、らハゆゑのよこ後より所と

多量心所は起りて夜もさるる金指作、神真毛、つらき

撰寫亦能

田一救うつてまする柳の歌

志はしとてこころとほうつれと田位上人の詠承る人より
乙女乃のまを極てけ田へ移る事なまをひきりく
其眼りききよと句申よまをこめくすれを西上人と
句言同し誦撰亦能

宛轉折旋

先以そ一極を心の冬こわら

耳たよりまをゆるんるを極て今うまを兼る人よ言ひて
めく出く打巻くる祝の姿信白上あまきこらりぬ

